

# イザドラ・ダンカンの初期舞踊形成・公演活動について ——アメリカでの活動を中心に——

柳 下 恵 美

## The Construction of Isadora Duncan's Dances and Her Performance Activities : Her Early Career in the United States

Emi YAGISHITA

### Abstract

Isadora Duncan (1877-1927) left the United States in 1899 for Europe. How she started to study dance, what kinds of dance she was trained in, and her early dance career are somewhat mysterious. Therefore, this paper examines these topics, including the process with which she created her own dance and performances especially in New York.

The materials I use for this paper are an unpublished memoir of Isadora's brother, Raymond Duncan, which a descendent of Isadora Duncan gave me, and historical newspapers, photos, magazines, pamphlets and other primary resources.

Isadora wrote in *My Life*: "...it is certainly to this wild untrammled life of my childhood that I owe the inspiration of the dance I created, which was but the expression of freedom." In spite of this claim, though, I discovered Isadora learned Irish folk dance, social dance, gymnastics, Indian clubs (a type of exercise), the Delsarte system and ballet. Most people think that she improvised her dances and that she did not study dance seriously. However, she obviously experienced many kinds of dance, in spite of her own statement about childhood freedom, and all these practices were important in creating her unique style.

### はじめに

モダンダンスの創始者イザドラ・ダンカンは、20世紀初頭、独自の舞踊を編み出し、世界各地で自らの舞踊思想を基に数多くの公演活動を行った。その結果、当時の多くの芸術家、知識人、批評家たちから称賛と高い評価を受け、自身の舞踊を芸術という領域に高めることに成功し、舞踊界のみならず、当時の文化、社会にまで多大な影響を与えることになった。しかしながら、イザドラ独自の舞踊形成過程についてこれまで曖昧で不明確な点が多く、とりわけ、彼女が幼少期にどのような舞踊教育を受け、その後いかに初期の舞踊を形成したのかについては詳細な研究がなされてこなかった。

本論文は、これまで開示されることがなかったイ

ザドラの末裔所蔵の兄レイモンドの覚書と当時の新聞記事、雑誌などの一次史料を基に、19世紀末のアメリカにおけるイザドラの初期活動に焦点をあて、これまで不明瞭であったイザドラの舞踊の形成と公演活動の詳細について、彼女の家族の活動にも触れながら考察し明確にする。

### 1. イザドラの家系と生い立ち

イザドラの父ジョゼフは先祖にウィリアム・ダンカン将軍<sup>(1)</sup>がいるなど、フィラデルフィアの由緒ある一族の出身で、ニューオーリンズの新聞社<sup>(2)</sup>に勤めた後、1849年にカリフォルニアに移り、実業家となった。

芸術愛好家であった父ジョゼフは、美術協会の会

長も務め、とりわけ詩に造詣が深かったことから、古代ギリシアへの憧憬の自身の詩「陰刻」を詩選集『不意の出来事<sup>(3)</sup>』に載せている。イザドラは自伝に「父に時々会って、彼が詩人であることを知り、理解するようになった。彼の詩の中には、言わば、私の全人生を予言しているようなものもあった。私が父の人生について説明するのは、こうした子供時代の印象が、私の後の人生に大きな影響を与えたからだ<sup>(4)</sup>」と述べており、このことからイザドラの人生の根幹には父親の思想が大いに関わっていることが推察できた<sup>(5)</sup>。

一方、母ドラは、セントルイスで連邦徴税官を務めていたトーマス・グレイと熱心なカトリック信者のメアリー・ゴーマンとの間に生まれ、裕福な家庭のもとでピアノ等を習い教養を身に付けて育った。ジョセフとドラの間には長女エリザベス<sup>(6)</sup>を筆頭に、長男オーガスティン<sup>(7)</sup>、次男レイモンド<sup>(8)</sup>、そして4番目の子としてイザドラが授かった。イザドラの生年月日については諸説があり、長兄のオーガスティンは、1947年、高等裁判所判事エドワード・マーフィーの前で、1878年5月27日と証言し、また*The Real Isadora*の著者でイザドラの友人でもあるヴィクトール・セロフ、その他の研究者も同日を生誕日としている<sup>(9)</sup>。しかし、次兄のレイモンドは終始一貫してイザドラは1877年5月26日生まれと主張してきた。先行研究者のブレア<sup>(10)</sup>に続いて、筆者は実際にニューヨーク公共図書館所蔵のイザドラの洗礼証明書<sup>(11)</sup>を閲覧することによりレイモンドの説が正しいと確認することができた。

イザドラの幼少時、父ジョセフは自らの所有する銀行を倒産させた容疑で当局から追われ、余儀なく逃亡生活の身となる。母ドラにとってはこれまでの名誉ある一族の誇りが汚されたも同然で、ジョセフと離婚し、裕福な生活を営んでいたサンフランシスコから子供4人を引き連れて、ロサンゼルスに居を移した<sup>(12)</sup>。しかし、父親不在の家族は貧困生活から脱することができず、度重なる引っ越しを繰り返すことになり、母ドラはピアノを教えたり編み物を売るなどして生計を立てながら4人の子供たちを必死に育てることになった。

## 2. 学校生活と子供時代の教育

5歳で小学校に入学したイザドラは、当時の学校

生活を振り返り、自伝に以下のように記している。

私がつらい思いをしたのは学校だけだった。誇り高く傷つきやすい子供にとって、公立学校は監獄と同じくらいに屈辱的なところだった。〔中略〕学校に行くのは時間の無駄だったからだ。私はお金を稼ぐほうがずっと大切だと思っていた。<sup>(13)</sup>

このようにイザドラの小学校での体験<sup>(14)</sup>は決して良いものではなかったが、この辛い体験が、後に自身の理想とする舞踊学校を創設したいという強い思いの原点になる。10歳頃、学校に行くことをやめたイザドラは、母親の弾くピアノ音楽、読み聞かせる詩などによって教養を身につけたと次の言葉を残している。

わたしにとっての本当の教育は、夜、母がベートーヴェンやシューマン、シューベルト、モーツァルト、ショパンなどの曲を演奏し、シェイクスピア、シェリー、キーツ、バーンズなどの詩を朗読してくれる時間に行われた。こうした時間は魅力にあふれていた。<sup>(15)</sup>

同じ頃、公立図書館でディケンズ、サッカレー、シェイクスピアなどイギリス人作家の数々の本も読破している。このことがイギリスへの憧れを募らせ、後にロンドン行きを決意する要因の一つとなったと思われる。その他、自ら小説や新聞記事を執筆し、日記もつけていることから<sup>(16)</sup>、彼女が一舞踊家に留まることなく、*The Art of the Dance*等で書き著した舞踊哲学、公演の後の講話や自伝を記述する基盤がこの頃既に形成されたものと考えられる。

## 3. 舞踊への関心と舞踊教育

イザドラの舞踊への関心はどのように育まれていったのであろうか。イザドラは次のような言葉を残している。

私が初めて動きやダンスについてひらめいたのは、波のリズムからだった。〔中略〕学校という牢獄から逃れることができれば、私は全く自由だった。海辺を一人で歩き回り、さまざまな想像に胸をふくらませた。〔中略〕私が創りだしたダンスの着想

は、この子供時代の自由な生活があったからこそ得ることができたからだ。(17)

イザドラは波、風、木の葉のそよぐ音などの自然と親しむことから、想像力豊かな子供となり、自らのダンスの着想を得るまでになった。さらに、時々家にやってきた母方の祖母がリールやジグを踊り、また叔母のオーガスタが得意の芝居を実演して見せるなど、家の中は音楽と詩や芝居で満ち溢れていた。おそらくイザドラにとって最初に観て覚えたダンスは、祖母が踊る民族舞踊だったのではないだろうか。実際、ダンカン舞踊のグループダンスには円を作って回るところや、2人が組になって手をつないで回転する動きがあるが、これらは祖母の民族舞踊の一部に起因していると考えられる。一方、清教徒的精神の強い名家に育ち女優になる夢を実現できなかった叔母を身近にみて(18)、イザドラは才能ある叔母が舞台に立てない当時の偏見に満ちた社会や状況に対し疑問を抱くようになった。

1884年頃から、ダンカン一家は家計の足しになるように近隣の裕福な子供達のために裁縫や演劇のクラスを設け、授業料を課していた(19)。このように、子供達に様々なクラスを提供することができたのは、母親が名家の生まれで質の高い教養を身に付けていたためであった。イザドラの親友フローレンス・トレッドウェルもイザドラの家を頻繁に訪れ、シェイクスピアの寸劇を演じたり、ダンスを共に踊っていたことを自身の娘に話している(20)。イザドラは当時住んでいた家(21)について「父は私たちに広いダンス室とテニスコート、それに納屋と風車のついた美しい家をプレゼントしてくれた(22)」と自伝に記している。

図1はその邸宅の前で撮影された写真であり、左端に母親のドラ、そして生徒たちの中にはイザドラ、レイモンド、エリザベスがいる。幼少期、祖母と叔母の影響を得て踊っていたイザドラは、モสบaumというダンス教師から本格的にダンスを学んでいた(23)。レイモンドの覚書によると、モสบaumは週に1度イザドラの家を訪問し、母ドラのピアノ伴奏(24)に合わせて、ステップやポルカ、スコティッシュ、マルゲラン(ワルツ)(25)を燕尾服の裾を持ち上げて教えていたようである。イザドラは教師の卓越した教えの中で、後にとりわけ彼女の舞踊システムの鍵となるワルツ(26)に関心を寄せてい



図1. オークランドの家の前で：  
白枠内、左前から右へ時計回りに母ドラ、  
エリザベス、レイモンド、イザドラ

た。実際、一緒に舞踊教育を受けていたレイモンドは以下のように記している。

私たちににとって最も興味があり、また時々わからなかったのは、ワルツ(27)を始める前に一列に立って前方にそして後方に飛ぶことだった。これらの飛ぶ動きがそれぞれのアクセントになり身体を投げることを表すということを発見するまでには数年かかり、続く動きは、平衡のための自然な振動だった。〔中略〕この踊り(ワルツ)が後にイザドラとエリザベスの舞踊システムの鍵になった。〔中略〕教師のモสบaumは非常に洗練されたテクニックでメヌエットとガヴオットも教え、ワルツを除けば、これらは非常に容易に習得できた(28)。

しかし、音楽のリズムについて母ドラとモสบaumの意見の相違から、モสบaumの訪問がなくなると、その後はエリザベスがダンス教師を務めることになった(29)。レイモンドは「ダンカン一家は舞踊学校の発表会をいくつか観て、ファンシー・ダンス(30)と呼ばれている踊りの目立つ部分を採用した(31)」と記述し、その一例として、少女が網のようなヴェールを持ち、少年がラケットを持って動く『テニス・ダンス』を挙げ、エリザベスのお気に入りの作品の1つであったとしている。さらに、この踊りをイザドラが蝶の網を手を持って、蝶々を追いかけるという動きを『蝶々』の踊りとして発展させ、これがイザドラの最初の創作となったと見做している。このようなイザドラとエリザベスのクラスが暫く続いた後、デルサルト・システム(32)を学ぶことが2人の舞踊の概念を広げることに繋がり、一時期

イザドラがデルサルトを、エリザベスがダンスを教えている。イザドラがデルサルトを教えていたことは興味深い<sup>(33)</sup>。イザドラは、当時デルサルト・システム教師という肩書きがあり<sup>(34)</sup>、後に恋人となったクレイグ<sup>(35)</sup>も「イザドラはカバンの中にデルサルトの本を持っていた<sup>(36)</sup>」と語っている。レイモンドは「どの程度彼女たちがデルサルト・システムを学んだかよく覚えていないが、踊りの中には手首が動きを先導し、手先は従うといった腕の動きが原則にあった<sup>(37)</sup>」と覚書に記述している。

またイザドラは幼年期にエリザベスと共にジムナスティック（体操）の教師パウル・ウーテル<sup>(38)</sup>からインディアン・クラブ（体操用具の一部）の扱い方、跳び箱、平行棒、行進を習得した。ウーテルはドイツ語で指導しており、これが2人にとって後にドイツで舞踊学校を開設する際に役立つことになる。

レイモンドによると、イザドラが綱を手に持って踊った『蝶々』は、このインディアン・クラブ（図2）で習得した動き<sup>(39)</sup>を取り入れた可能性が高く、

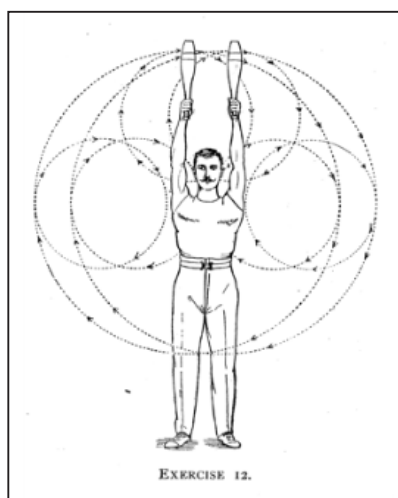


図2. インディアン・クラブのエクササイズの一例

体操クラブで学んだ行進の動きはいつも彼女の舞踊の中に取り入れられていた<sup>(40)</sup>。また、これらのレッスンで習得したテクニックと教授法は、イザドラの舞踊から決して離れることはなく、彼女の創作の一部に常に重要な特徴として残っている<sup>(41)</sup>。イザドラはオークランドのディエッツ・オペラハウスで、『ファンシー・ダンス』、『蝶の踊り』、そして『パントマイム』を踊っているが、これらの踊りは、彼女がエリザベスと共に舞踊学校の発表会を観て取り入れたファンシー・ダンスとジムナスティックのクラ

スの学びを基に、最初に創作した『蝶々』ではないかと推察される。

その後、ダンカン一家はサンフランシスコに戻り、ヴァンネス通りとサター通りの角にある古い邸宅<sup>(42)</sup>に芸術学校を創設している。この学校でエリザベスとイザドラのクラスはさらに拡大し、大広間ではオーガスティンが英国人詩人の詩を朗読する会を開催するなど、社会的で文学的な活動へ範囲を広げることになる。活動は家の中だけに留まらず、オーガスティンがカリフォルニアの街を巡回してシェイクスピアとオーウェン・メレディス<sup>(43)</sup>の朗読を行い、当時まだ12歳だったイザドラが踊り、エリザベスとレイモンドが加わって喜劇を演じるなど大成功を取めた<sup>(44)</sup>。

翌年、レイモンドはオークランドのユニタリアン教会（図3）を15ドルで借り、そこでイザドラはパントマイムのダンスを踊り、軽快なダンスをレイモンドと2人で踊っている<sup>(45)</sup>。ダンカン一家としても西海岸沿いに巡業（サンタクララ、サンタローザ、サンタバーバラなど）に出るなど、外での活動を精力的に行った。



図3. ユニタリアン教会



図4. 左からエリザベス、レイモンド、イザドラ、オーガスティン

このように、イザドラの家族は、クラスの開講、公演巡業、リサイタルの開催をするなどそれぞれが役割を担いながら生活資金を一家総出で稼いでいた(図4)。しかし、踊りの主役は常にイザドラであった。

その後も生活費を稼ぐため、イザドラはサンフランシスコで興行を行っていた劇団のマネージャーの前で母のピアノ伴奏に合わせて踊りを披露している。しかし、「この種の出し物は、舞台には合いませんね。むしろ、教会向きですよ。どうぞ、お嬢さんを家に連れて帰ってあげてください<sup>(46)</sup>」と断られ、サンフランシスコに希望を見出すことができなくなったイザドラは、その当時商業都市として栄えていたシカゴに行くことを決意することになる。

#### 4. シカゴでの舞踊とデイリー劇団

1895年、18歳のイザドラは母とともにシカゴに行き、劇場のマネージャーの前で踊っているが、ここでも「これは劇場向きではない」と断られ、所持金も底をついたため職業案内所に足を運んでいる<sup>(47)</sup>。そのような時、イザドラは「オールド・ボヘミア」という芸術家、作家、俳優、音楽家などが集まるサークル<sup>(48)</sup>で知り合った友人からメイソン寺院ルーフガーデン<sup>(49)</sup>のマネージャー、チャールズ・フェアを紹介された。彼女はマネージャーの前でメンデルスゾーンの『春の歌』の踊りを披露するが、マネージャーからは脚を蹴り上げるカンカン踊りを要求されてしまった。生活のために仕方なく踊らされていた踊りは大成功であったが、信念に従って行動できなかった自己を嫌悪した様子が次の文章から読み取れる。

ここで私は偽名を使って大成功を収めたが、じつは何もかもが嫌だった。そしてその週の終わりにマネージャーが契約延長と旅興行を申し出たが断ってしまった。私たちは飢え死にしないですんだが、自分の理想に反することをして人々を喜ばせるのはもうたくさんだった。そしてこの時がそのようなことをした最初で最後だった。<sup>(50)</sup>

当時のアメリカでは、イザドラの考案した舞踊を理解する土壌が出来上がっておらず、イザドラに踊りを「芸術」の領域に高めたいという強い思いを募

らせるのは、このような状況があったからであろう。しかし、この頃イザドラは家族の生活費を稼ぐために、自身の持つ舞踊の理想とはかけ離れた条件を受け入れ、メイソン寺院のルーフガーデンに週20ドルで3週間<sup>(51)</sup>ほど出演していた。

自分の理想に反してメイソン寺院で踊り続ける生活に嫌気がさした頃、新聞記事に掲載されていたオーガスティン・デイリー劇団の記事が目に入り、イザドラはオーガスティン・デイリーに会うことを決意した。デイリーは当時アメリカ随一の芸術愛好家で、美的感覚に優れていると言われた高名な演出家であった<sup>(52)</sup>。彼女は彼の前で演劇における舞踊の重要性を力説し契約を獲得、ニューヨークで公演する予定の『ミス・ピグマリオン』の端役<sup>(53)</sup>をもらうことになる。劇団に入り踊りを披露したいと考えたのは、幼い頃叔母のオーガスタが家に来て芝居を演じて皆を楽しませていたことなど、演劇がイザドラにとって近い存在であり、何よりも芸術愛好家のデイリーに認めてほしいという思いがあったからであろう。

契約成立後、ニューヨークにあるデイリー劇場の楽屋口に出向いたイザドラは、当時のパントマイムのスター、ジェーン・メイ<sup>(54)</sup>と昼食抜きのリハーサル<sup>(55)</sup>を3週間ほど行っている。しかし、この劇団で与えられたイザドラの役は、踊りではなく18世紀風の衣装に金髪のかつらと大きな麦わら帽子を被ってパントマイムを演じるというものであった。

「私が世界にもたらすことになっている芸術革命にとって、何と悲しいことだろうか!<sup>(56)</sup>」と嘆いているように、まともや自身の舞踊を踊ることので



図5.『真夏の夜の夢』で妖精役を演じるイザドラ(1896年頃)

きない苦痛に耐えている様子がこの言葉から読み取れる。この時、イザドラは「芸術革命」という言葉を発しているが、これは舞踊を真の芸術の高みに持っていきたいと切望していた彼女の舞踊精神に反する行動をしていたからこそ吐露した言葉であったに違いない。その後、イザドラは『真夏の夜の夢』で踊る妖精役(図5)を得ることになるが、彼女自身は舞踊は人間の思いや感情を表現するためのものと考え、妖精役には興味がなかった<sup>(57)</sup>。ところが舞台上で彼女の踊る姿を見た観客が拍手を送ったことから「ここは演芸場ではない」と逆にデイリーをひどく怒らせてしまうことになる<sup>(58)</sup>。

イザドラは、妖精役で週25ドルという当時としてはかなりの高額を得ていたが、自身の抱いていた舞踊を劇団内で実現するには至らず、この頃あまり幸福ではなかったようである<sup>(59)</sup>。デイリーの立腹した態度から、イザドラは彼女の舞踊がまだ芸術として認められていないことに気付き、より一層舞踊を芸術として認めさせたいとの思いを強くしていく一方、劇団でのジェーン・メイのパントマイムと主演女優のアダ・レーハン<sup>(60)</sup>の演技を目の当たりにして、両者から舞台での存在感を見出す秘訣を学んでいた。

デイリー劇団でのイザドラはニューヨークだけに留まらず、劇団と共に渡英し、そこでも公演活動を続けた。さらに、彼女にとって有益だったのは、エンパイア劇場で振付を行っていたカティ・ランナーというバレエ教師からバレエのレッスンを受けたことである<sup>(61)</sup>。しかし、イザドラは入団して僅か2年数か月後の1897年暮れか1898年初旬頃にデイリー劇団を去ることになる<sup>(62)</sup>。レイモンドが「最終的には私たちはイザドラにデイリーの劇団を辞めるように説得し、彼女に再びダンスをするように促した<sup>(63)</sup>」と記していることから、デイリー劇団を辞めたのは彼女の意志だけでなく、当時ニューヨークに在住していたダンカン一家の考えも大いに影響していたと思われる。

## 5. 劇団退団後とアメリカでの初期舞踊公演

デイリー劇団退団後、独自の道を歩むことを決意し、再び白いドレスを身に纏い母のピアノに合わせて踊る毎日に戻った<sup>(64)</sup>イザドラは、ニューヨークで舞踊学校を開いていたイタリア人バレエ教師のマ

リー・ボンファンティにバレエを学んでいる<sup>(65)</sup>。ボンファンティは、彼女が踊った『ブラック・クルック』がアメリカ中で大ヒットするなど、アメリカにバレエ・ブームを巻き起こした人物であった。

この頃のイザドラは自身の舞踊形成に励むことになるが、兄レイモンドの協力にも注目しなくてはならない。レイモンドは、舞踊が偉大な芸術であったことを声高に唱えなくてはならないと感じ、この時期『舞踊の哲学』を執筆、その原稿をエリザベスがニューヨークの名士アーサー・ドッジ夫人の家で読んだと覚書に記述している<sup>(66)</sup>。実際、筆者が当時の新聞記事を調べたところ、1898年2月15日にドッジ夫人の家でエリザベスの朗読とイザドラの舞踊を披露していることが確認できた。新聞には朗読された原稿の一部が次のように掲載されていた。

舞踊は至高の動きの表現で、舞踊の訓練は身体から受け取る精神の支えを増加させる。踊ることは、音楽と詩を表現しその双方を享受し、魅了させる手段であるべきである。舞踊は新しい考えと新しい感覚を伝えることができる。<sup>(67)</sup>

レイモンドはまた、「講義は大成功を収め、これがイザドラの未来の偉大なダンスの源となった<sup>(68)</sup>」と記述している。この記述はイザドラの舞踊形成においてレイモンドの舞踊哲学が必須であったことを示唆しているのではないだろうか。この公演で、イザドラはヨハン・シュトラウス2世のワルツ<sup>(69)</sup>やエリザベスの朗読を身体で描写、イグナツィ・パデレフスキの曲で『さすらいの踊り』、エセルバート・ネヴィンの曲で『ナルシスの物語』、オマル・ハイヤームの『ルバイヤート』、『海の精』、アンジェロ・ポリツィアーノの詩をエデュアード・ホルストの『メヌエット』で表現し、最後に『陽気な踊り』を踊った<sup>(70)</sup>。当時の新聞記事によれば、イザドラの踊りは非常に優雅で、観客は脚よりも上半身と腕の動きの方に目が惹きつけられたようである<sup>(71)</sup>。

1898年2月28日には、イザドラはカーネギー・ホールスタジオでダンスを教えていたエリザベスが主催するお茶会で踊っている。この公演を伝える新聞記事によると、白の薄いガウンに短いスカート、ピンクのタイツとバレエ・シューズを身に付けていたようであるが<sup>(72)</sup>、ここから当時のイザドラ

がバレエ的な衣装を身に纏っていた様子が読み取れる。この公演でエリザベスは中世ラテンの歌『春の精』を朗読し、イザドラはワルツの音楽と共に身体でその詩を大変優雅に描写した。この作品で表現されたのは、大地が暖まり、春の訪れにより花々が目覚めるというものであった。他には、『ルバイヤート』の詩を表現し踊っていたようであり、観客席にはニューヨークの名士の夫人達がいたことも記述されている<sup>(73)</sup>。また、同年3月9日付のニューヨーク・タイムズ紙は、「3月8日にエリザベス・ダンカンが土曜の朝のダンスのクラスの女性たちの後援の下、B・S・スターンベーカー夫人の家で『舞踊の哲学』を朗読し、イザドラ・ダンカンが姉の朗読を踊りで表現した。」と伝えている<sup>(74)</sup>。

イザドラの踊りが飛躍的に開花したのは『オフィーリア』の踊りからであることがレイモンドの記述からわかった。レイモンドは「イザドラが踊るためのテーマを探していると、誰かが作曲家エセルバート・ネヴィンの『ナルシスの組曲』、『水の精』、『オフィーリア』を持ってきた〔中略〕イザドラはとくに『オフィーリア』を踊る時、天賦の才の兆候を現わしはじめ、それまで、彼女の多くの作品は優雅で可愛らしく、魅力的であったが、『オフィーリア』で彼女は劇的な力を発した<sup>(75)</sup>」と覚書に記している。イザドラはこの『オフィーリア』を踊ることで、今までの優雅で可愛い踊りから、演じる踊りに変わっていったと思われる。これはデイリー劇団で2年以上学んだ成果であるとイザドラ自身が一番感じていたのではないだろうか。

ヨーロッパから帰国した直後のネヴィン<sup>(76)</sup>は、当初イザドラが自身の曲に合わせて踊っていることに立腹した。しかし、イザドラの踊りを見て感激したネヴィンは、逆に彼のコンサートへの出演依頼をし、1898年3月24日、共にカーネギー・ホールのライシウム劇場で、錚々たる富裕層の夫人達の後援を得て公演を行うことになった<sup>(77)</sup>。この時ネヴィンは自作の『慈悲』、『羊飼いの』、『ハーレクイン』などを弾き、イザドラはネヴィンが『水のシーン』と呼んだ曲で『水の精』を、その他にも『オフィーリア』、『ナルシス』を踊っている。2日後の3月26日には、ニューヨークのウィリアム・K・オティス夫人の家で、ジョン・ミルトンの詩『陽気な人』と『思い耽る人』<sup>(78)</sup>をイザドラが解釈し踊りで表現しているが、この公演も多数の富裕層の夫人が後

援している<sup>(79)</sup>。

イザドラはこの時期、ネヴィンとは別にダンカン一家としても公演を行っている。4月17日のニューヨーク・タイムズ紙は「カーネギー・ホールの大きなスタジオでメンデルスゾーンの『真夏の夜の夢』をピアノの音と共に軽快に踊っているイザドラは、舞踊を通して音楽を翻訳し、上流階級の人たちを喜ばせていた。エリザベスは朗読、母がピアノ伴奏、レイモンドが舞踊を言葉にしていた。カリフォルニアから来たダンカン一家は、彼らが新しい芸術であると同時に新しい科学と言っているものを東海岸に持ち込んだ<sup>(80)</sup>」とダンカン一家の活躍ぶりを称賛している。

UCLAのスペシャル・コレクションズ所蔵のイザドラの初期プログラムから、イザドラが1898年7月18日に、ロンドンのローサー・ロッジで『ナルシスの物語』という題目の公演を行っており、イザドラがマイヤー・ヘルムンドの歌と『ナルシス』を踊り、エリザベスが『オウィディウスより牧歌舞踊組曲』を朗読、母親がピアノを弾いている<sup>(81)</sup>ことが判明した。このことから、通説<sup>(82)</sup>に反し、イザドラは1898年の時点で、既にロンドンでも自身の公演を行っていたことが明らかになった。

ロンドンでの公演後、イザドラと家族はニューヨークに戻り、7月27日にはオスカー・アイアザジ夫人の別荘にあるボニー・ブラエの庭で公演<sup>(83)</sup>を、9月にはロード・アイランド・アヴェニューにあるマゾン嬢のヴィラの庭で『テオクリトスの牧歌詩とその他のシーン』と題したりサイタルを開催し<sup>(84)</sup>、10月にも『ルバイヤート』をダンスリサイタルとして精力的に公演を行っている<sup>(85)</sup>。

1899年3月2日のニューヨーク・タイムズ紙には、「新しい芸術」としてイザドラがポッター・パルマー夫人主催の下にダンスリサイタルを披露し、『ルバイヤート』やネヴィンの『ナルシス』、『陽気な踊り』、『春の精』、メンデルスゾーンの『真夏の夜の夢』、パデレフスキーの『さすらいの踊り』などを踊ったと記され、イザドラの繊細な解釈と情熱的な踊りは素晴らしく、過去に試みられたものとは全く異なっていると評価されている<sup>(86)</sup>。

3月14日にはライシウム劇場で、ロバート・オスボーン夫人主催の下、作家のジャスティン・ハントレー・マッカーシーのハイヤームについての講義後イザドラが踊るといふ公演を行っている。公演

から5日後の新聞は、イザドラのポーズは、ハイヤームの詩よりも彼女自身の身体ラインの表現をしていたと記述している(87)。

図6は1899年2月5日号のザ・ニューイングランド・ホーム・マガジンに掲載されたイザドラが『ルバイヤート』に合わせて踊っている姿である。



図6.『ルバイヤート』を踊るイザドラ

『ルバイヤート』の詩が写真下に記述されていることから、掲載されている詩を写真のポーズや動きで表現したと推察される。これらの写真からも、初期活動時代のイザドラは、白いレースのドレスにタイツとバレエ・シューズを履き、バレエの要素を含んだ可愛いスタイルで踊っていることが確認できる。

しかし、同年の3月17日、当時居住していたウィンザー・ホテルが火災で全焼(88)したことから、殆ど財産を失った一家は、アーサー・フォン・ブリーゼン氏宅へ一時避難、その後はホテルバックinghamに落ち着いた。その後も収入を得るため、イザドラは公演活動を続け、4月10日にはジョン・ディ・ゼレガ夫人の企画によりレストラン「デルモニコズ」において『春のダンス』というタイトルで公演(89)、そこで『春の目覚め』を踊っている。だが、この公演ではイザドラの踊り以外にも他の踊りの披露と夕食がもてなされており、当時イザドラの舞踊はまだ余興的な位置づけをされていたと考えられる。

一家としての公演では、ライシウム劇場で4月18日に、レイモンドが『より幸せな黄金時代』と題した講演を行い、オーガスティンとエリザベスがギリシアの羊飼いの衣装を着て対話を始め、イザドラが牧歌舞踊を踊った(90)。

このようにイザドラと家族は、滞在先のホテルが

火災事故で多大な損害を受けた後も公演活動を続けたが、支援者からの寄付金を合わせても期待以上の収益にならず、アメリカにおいて自身の踊りが芸術として認められることはなかった。イザドラは、自身の舞踊のさらなる向上を求め、以前から憧れていたイギリスに家族と共に向かうことにした。

## おわりに

本論では、イザドラのアメリカでの舞踊形成と初期活動に焦点をあて、主にレイモンドの覚え書きや当時の新聞記事を検証し論じた。その結果、自然に親しんでいた幼少期に芸術的な気質をもった親戚や家族の影響があり、とりわけ祖母のアイランド舞踊がイザドラに初めて踊るきっかけを与えたのではないかと推察できた。また、公立学校での環境に満足しなかったイザドラが、母親から教養を身に付けそれを真の教育としていたことや父親のギリシア憧憬の影響もあったことが父親の詩からも確認できた。

これまでの先行研究ではイザドラの舞踊は思い付きや即興で踊られていたと記述されるものが多く、イザドラがどのような舞踊教育を受けていたかについては曖昧で不明瞭であったが、レイモンドの未刊の覚え書きから、幼少期から体操クラブに通い、自宅では舞踊教師から舞踊の基本的なステップを、10代になってからは一流のバレリーナに学んでいたことが明確になった。

作曲家ネヴィンとの共演により多くの富裕層からさらなる支援を得て、知名度が増すことになったイザドラは、『オフィーリア』の踊りによりそれまでの可愛い踊りから飛躍的に開花したことがレイモンドの覚え書きで明らかとなった。それは2年数か月デイリー劇団で学んだ成果であったと推察できる。しかし、富裕層に招かれ踊りが称賛されはしても、イザドラの踊りは当時のアメリカでは余興や娯楽的なものと見做される傾向にあった。

自身の舞踊を芸術の域に高めていきたいと強く願っていたイザドラは、このことに不満を持ち、滞在先ホテルの火災事故をきっかけに、以前から本を読み憧れていたロンドンを新天地として選んだ。ヨーロッパに移住してからのイザドラは、美術館や図書館等でも舞踊研究に励み、自身の舞踊精神を基にギリシア風チュニックに裸足というスタイルを編み出し、独自の舞踊を確立していくことになる。



イザドラの舞踊の確立には、渡欧前のアメリカでの初期時代に祖母の民族舞踊をはじめ、舞踊に必要なステップ、バレエ、体操等を専門の教師から習得していたこと、またデイリー劇団でパントマイムや演技等を学び、研鑽を積んだことが基盤になっているといえるのではないだろうか。その意味から、本論によりイザドラの初期舞踊形成と公演活動を明確にしたことは意義があり、加えて、イザドラの初期活動にはレイモンドの舞踊哲学の影響があったことも見逃すことができないであろう。

### 図版出典一覧

- 図1 : Duncan, Dorée, ed. *Life into Art : Isadora Duncan and her world*(以下 *LIA* と記す). New York: Norton, 1993, p.27.
- 図2 : Moss, Staff-Sergt. *Simple Indian Club Exercises*. London: Ewart Seymour &Co., 1905, n.p.
- 図3 : *Dance Magazine* July 1977, p.49.
- 図4 : *LIA*, p.29.
- 図5 : *LIA*, p.31.
- 図6 : *The New England Home Magazine* Feb. 1899, pp.247-248.

### 注

- (1) アメリカ独立戦争(1775年4月19日-1783年9月3日)でジョージ・ワシントン将軍の下で戦い、後にジョン・ジャクソン将軍の知己となった人物。
- (2) Crescentという会社。Rather, Lois. *Lovely Isadora*(以下 *LI* と記す). Oakland, CA: Rather Press, 1976, p.10.
- (3) Harte, Bret, ed. *Outcroppings: Being Selections of California Verse*. San Francisco: A.Roman, 1866.
- (4) Duncan, Isadora. *My Life*(以下 *ML* と記す). New York: Liveright, 1955, p.16.
- (5) ダンカン一家は、後にギリシア訪問を実現することになるが、その時イザドラは父の描いた詩の中にあるような(舞踊の)神殿を建て、そこで少女に舞踊を教えたいと強い想いを抱いた。
- (6) 1871年11月8日生まれ。
- (7) 1873年4月17日生まれ。
- (8) 1874年11月1日生まれ。
- (9) Seroff, Victor. *The Real Isadora*. New York: Avon Books, 1972, p.24.

- (10) Blair, Fredrika. *Isadora: Portrait of the Artist as a Woman*(以下 Blair とのみ記す). New York : William Morrow, 1986, pp.5-6 にはラテン語で洗礼証明書が記述されていたと書いているが、その出典は記述されていない。
- (11) 筆者が閲覧したニューヨーク公共図書館所蔵の洗礼証明書は英語で記述されていた。
- (12) Blair, 1986, p.8.
- (13) *ML*, p.14.
- (14) *ML*, pp.12-14.
- (15) *ML*, p.13.
- (16) *ML*, p.23.
- (17) *ML*, p.10.
- (18) *ML*, p.19. 「彼女の両親は演劇に関する一切の事柄を悪魔の仕事だと見下していた。もしそうでなければ、歌手として大成功していたかもしれない。今ではとても説明のつかないこと、つまりアメリカの清教徒意識によって彼女の人生がいかにか破壊されたか、私にはよく分かる。彼らは自分たちをも手なずけようとして、芸術に悲惨な結果をもたらしたのだった。」
- (19) *LI*, p.29.
- (20) *LI*, p.2. Blair, p.19 オーガスティンは納屋を劇場に仕立て、近所で評判を呼んでいた。
- (21) 当時の家は、離婚した父ジョセフが再び事業に成功し、家族に購入したもので、オークランドの1365番地8番通りに位置していた。
- (22) *ML*, p.16.
- (23) Duncan, Raymond. *Memoir* (no title: 以下 *RD* と記す). n.d. p.1; Duncan, Dorée, ed. *Life into Art : Isadora Duncan and her world*(以下 *LIA* と記す). New York: Norton, 1993, p.28. オークランドの音楽舞踊評論家のポール・ハーテランディはモสบaumを1885年から1890年まで市に登録されていたサンフランシスコのジェイ・モสบaumという舞踊教師と同一視している。*Dance Magazine* July 1977, p.50.
- (24) ドラは1886年にはオークランドのピアニストとして見做されており、1892年の人名簿には音楽教師と記載されている。*LI*, p.25.
- (25) マルゲランはワルツのこと。モสบaumはこの踊りを得意としていたようである。
- (26) イザドラの考案した舞踊の中には『美しく青きドナウ』の中のワルツをはじめ、数多くのワルツのステップがある。
- (27) *RD*, pp.1-2. 彼は右の前方に飛ぶ方法、左足を左先端

に引き寄せること、それから右足を滑らせ、左に加え、左足を伴って左後方より先に飛び、左足を後ろの先端まで引き寄せ、それから左足を右足に付けるまで滑らせ、これを繰り返した。これら4つの位置は四角に形成され、それぞれの動きはステップでワルツをして、右に回るといふもので、それから反対になって、左側に回り、左足から前方に跳び、最初の動きに続くといふものだった。

- (28) *RD*, p.2.
- (29) *RD*, p.3によると、エリザベスは学校の教師になるのが夢だったようだが、ダンスを教えることになったと記述してある。
- (30) 現在ではPrecision Danceとして知られているもの。ラインダンスのようなものと考えられる。
- (31) *RD*, p.3.
- (32) デルサルト・システムを考案したのは、フランソワ・デルサルト(1811-1871)フランスの音楽教師。身体表現力を開発するためのデルサルト・メソッドとして知られるシステムを開発した。デルサルト自身はパリのオペラ・ハウスの芸術監督を務めたこともある人物だったが、あらゆる状況における人間の自然な動きを勉強し、俳優たちがより自然に演技できるように教えた。彼は病気で瀕死状態のジェスチャーを学ぶために病院を訪れ、フランスの演劇に多大な変革をもたらした。彼は人間の運動を3つのカテゴリー(偏心的、同心的、正常)と3つのゾーン(頭、胴、手足)に分け、生徒たちの身体制御力を開発した。デルサルトの影響はイザドラのみに留まらず、ダルクローズ、テッド・ショーンなど多くのモダンダンサーが彼のメソッドを取り入れている。イザドラにデルサルト・システムを教えたのは誰か不明である。
- (33) ブレアもイザドラが少なからずデルサルト体操の影響を受けていたと記述しているが(Blair, p.17), *RD*, p.4よりイザドラ自身がデルサルト体操のクラスを受け持っていたことが判明した。
- (34) Macdougall, Allan Ross. *Isadora: A Revolutionary in Art and Love*(以下*IARIAAL*と記す). New York: Thomas Nelson & Sons, 1960, p.31, p81.
- (35) ゴードン・クレイグ(1872-1966)舞台美術家。
- (36) Craig, Edward Gordon. *Index to the Story of My Days: Some Memoirs of Edward Gordon Craig, 1872-1907*. New York: Viking, 1957, p.264.
- (37) *RD*, p.4. デルサルト・システムはデルサルトの孫弟子にあたるジュネヴィーヴ・ステピンスによって記述

され、明らかにされた。その著書*Delsarte System of Expression*の初版は1885年である。この手首が動きを先導し、手は従うという腕の動きの原則は、イザドラの愛弟子リザ・ダンカンに学んだマドレーヌ・リットンが筆者に『ハーブ・エチュード』の踊り方を解説してくれた際、「手首が動きを先導し、手はそれに従う」と同様のことを話していた。これらのことを考慮すると、『ハーブ・エチュード』の手の動きの原点はデルサルト・システムに依っている可能性は高い。

- (38) *RD*, p.3. パウル・ウーテルは体操クラブに参加し、後にオークランドの公立学校のジムナスティックのクラスの監督になっているが、レイモンドによれば、アメリカの学校でジムナスティックの教師になったのは、ウーテルが初めてだったようである。
- (39) インディアン・クラブのエクササイズのような腕の動きを取り入れていた可能性が高い。
- (40) ダンカン舞踊の作品には『ラコッツィ行進曲』、『軍隊行進曲』などの行進の動きがある。
- (41) *RD*, p.4.
- (42) Blair, p.19と*IARIAAL*, p.29はこの家は父ジョセフが住ませてくれた家といっているが、実際父が与えてくれた家はオークランドの1365番地8番地に位置していたと思われる。サンフランシスコの富裕層が住むこのサター通りの家はセントラル・パシフィック鉄道会社を創設したチャールズ・クロッカーが購入したものであり、母親がひと月100ドルで借りていたことが、レイモンドの覚書から分かった。
- (43) オーウェン・メレディスはペンネームで、初代リットン伯爵のロバート・ブルワー＝リットン伯爵(1831-1891)。彼は筆者がインタビューを行ったダンカン・ダンサー、マドレーヌ・リットン(イザドラの愛弟子リザ・ダンカンの弟子)の曾祖父にあたる。
- (44) *ML*, p.20.
- (45) *RD*, pp.7-8.
- (46) *ML*, p.25.
- (47) *ML*, p.26.
- (48) *IARIAAL*, p.35.
- (49) 1892年に建設された22階建ての建物で、1895年から1899年まではアメリカで最も高いビルだった。
- (50) *ML*, p.28.
- (51) *IARIAAL*, p.35, Blair, p.23. しかし*ML*, p.28では週に50ドルを前払いしてくれたと記述してある。どちらが正しいかは確定できない。
- (52) *ML*, p.30.

- (53) Blair, p.24.
- (54) “New Theatrical Bills.” *New York Times* 19 Nov. 1895. ジェーン・メイはパリで非常に名高い女優だった。
- (55) リハーサル期間は無収入であった。
- (56) *ML*, p.35.
- (57) *ML*, p.36.
- (58) デイリーは演劇ではなく、イザドラの舞踊に対して観客が拍手をしたことに腹を立て、2人の間に亀裂が生じてしまった。
- (59) そのような時、イザドラはマルクス・アウレリウスの『自省録』を読むことで自身の気持ちを紛らわしているが、ここにイザドラの知的な一面が垣間見られる。
- (60) イザドラはアダ・レーハンの演技に憧れていた。*ML*, pp.37-38.
- (61) *RD*, p.13にはデイリー劇団のロンドン公演の際、ロンドンでバレエを学んでいたとの記述がある。*IARIAAL*, p.38にもカティ・ランナーに学んでいたとの記述がある。
- (62) Blair, pp.25-26.
- (63) *RD*, p.10.
- (64) Blair, p.26には、1898年にはニューヨークで5回シリーズの公演を開催していると記述してある。
- (65) *IARIAAL*, pp.38-39; Daly, Ann. *Done into Dance Isadora Duncan in America*. Middletown, CT: Wesleyan UP, 2002, p.71; *LIA*, p.33; Duncan, Irma. *Isadora Duncan: Pioneer in the Art of Dance*. New York: The New York Public Library, 1959, p.3でイルマもイザドラがニューヨークで1年間バレエのクラスを受けていたと記述しているが、おそらくボンファンティのクラスを受講していたことをいっていると思われる。
- (66) *RD*, p.10
- (67) “The Dance and Philosophy.” *New York Times* 16 Feb. 1898.
- (68) *RD*, p.11これが私たちの最初の成功であり、さらに先に進む必要があったとレイモンドは記している。
- (69) 『春の精』と題して踊る。
- (70) “The Dance and Philosophy.” *New York Times* 16 Feb. 1898.
- (71) “The Dance and Philosophy.” *New York Times* 16 Feb. 1898.
- (72) “Poetry in the Dance.” *New York Times* 1 Mar. 1898.
- (73) “Poetry in the Dance.” *New York Times* 1 Mar. 1898.
- (74) “Society Notes.” *New York Times* 9 Mar. 1898.
- (75) オーガスティンも、彼女のオフィーリアの踊りを観て、涙を流し、「君は偉大な女優だ」と言ったとレイモンドが記述している。*RD*, p.10
- (76) Kurth, Peter. *Isadora: A Sensational Life*. New York: Back Bay Books, 2002, p.44
- (77) “Music at Carnegie Hall.” *New York Times* 23 Mar. 1898.
- (78) どの曲を使用したかは不明。
- (79) “Society Notes.” *New York Times* 26 Mar. 1898.
- (80) “Philosophy in the Dance.” *New York Times* 17 Apr. 1898.
- (81) UCLAのSpecial Collections所蔵のイザドラの初期プログラム“The Story of Narcissus.”
- (82) 通説では、イザドラがロンドンで公演を始めたのはロンドン移住後の1899年以降と考えられている。
- (83) “Mr. Nevin’s Music.” *New York Times* 28 Jul. 1898; “Golfers at Stockbridge.” *New York Times* 31 Jul. 1898.
- (84) “Society News of NewPort.” *New York Times* 16 Sep. 1898.
- (85) “What is doing in Society.” *New York Times* 29 Oct. 1898.
- (86) “A New Art.” *The Humboldt Republican* 2 Mar. 1899.
- (87) “What is doing in Society.” *New York Times* 19 Mar. 1899.
- (88) “Windsor Hotel Disaster Grows.” *New York Times* 19 Mar. 1899; Duncan, Raymond. *How the Duncan Dance Begun*. n.d.(以下HTDDBと記す), p.14はこの火事で40人が死亡したことが記述されている。
- (89) “What is doing in Society.” *New York Times* 30 Mar. 1899には収益金はイザドラとウィンザーホテルに住んでいた人たちに寄付されることが記述されている。*HTDDB*, p.15にはエリザベスが毎朝デルモニコズの舞踊室で少女達にダンスのクラスを教えていたとの記述がある。
- (90) *RD*, p.12; *New York Times* 16, 17, 18 Apr. 1899; *The World* 15, 17, 18 Apr. 1899.